



© Atout France/Helene Moulonguet

### フランスフェア2014

3月19日(水)~25日(火)

阪急うめだ本店

9階催場+祝祭広場

<http://www.hankyu-dept.co.jp/honten/h/francefair2014/event.html>

### シェフ・ファクトリー

<http://www.chef-factory.com>

### リヨン観光局日本語サイト

<http://www.jp.lyon-france.com/>

## 阪急うめだフランスフェア明日開幕 今年のテーマ都市はリヨン！

2014年3月19日、大阪の阪急うめだ本店で恒例のフランスフェアが始まる。昨年の南仏イエールに続き、今年のテーマはフランス第2の都市リヨン。

現地から観光局、有名パン職人、伝統の人形劇などが来日し、会期中、会場はリヨン一色に染まる。

パリからTGVで南東に2時間、ローヌ・アルプ地方の中心地リヨンは古くから交通の要衝の地として栄え、絹織物とグルメでも知られる。石畳の旧市街から絹織物工房が点在するクロワ・ルース地区にかけては「リヨン歴史地区」として1998年ユネスコの世界遺産に登録された。

新旧のコントラストが鮮やかなリヨンは古い歴史を残しつつダイナミックな変貌もとげている。その一例がリヨンを流れるローヌ川とソーヌ川の合流点、コンフリュアンス地区の大規模な再開発だ。約150ヘクタールにわたるかつての河川運輸基地に遊歩道や住宅、ショッピングセンターなどを設け、今年中にコンフリュアンス博物館もオープンする。

今回の阪急うめだ本店フランスフェアではリヨン観光局から局長フランソワ・ガイヤール、広報担当ブランディーヌ・テネ、プロモーション担当アントニー・ペリの3氏が来日し、期間中毎日PRイベント「シェフ・ファクトリー」を開催。

シンボルマークにもなっている木のスプーンがプレゼントされ、リヨンの見どころや郷土料理を紹介する。

またフランスフェア初日の3月19日にはリヨン観光局と大阪観光局の間で提携文書調印も予定されている。

⇒リヨンの見どころとプレス取材のアイディアは次ページ以下を参照。

## リヨンの見どころ&取材アイデア

### リヨン Lyon

「美食の都」「絹の街」「金融の街」「ハイテクの街」、パリに次ぐフランス第二の都市にはさまざまな称号がある。

ローヌ川とソーヌ川の 2 本の川が街を横切り、背後にローマの遺跡を残すフルヴィエールの丘がそびえる。丘のすぐふもとにあたるソーヌ川の付近がローマ時代からルネサンス時代の建物がいまに息づく旧市街。ビュールイオン(Vieux Lyon)と呼ばれる古い町並みは、ユネスコ世界遺産に登録され、現在はリヨン随一のグルメ街となっている。街の東側のベルクール広場から市庁舎のあるテロー広場までのレピュブリック通り界隈はリヨンの繁華街。さらにローヌ川の東側はビジネス街として栄えており、川を境にして三様の異なった顔をのぞかせる。

旧市街には 14 世紀につくられた天文時計が名高いサン・ジャン大司教教会やローマの遺跡が残り、リヨンの街が一望にできるフルヴィエールの丘など見どころも多い。

リヨンで絹織物工業が発展したのは 1436 年にルイ 11 世が年 4 回、自由市を開催する特恵を授けたことが契機となった。かつて日本からカイコを輸入していたこともあり、こうしたリヨンの絹織物の歴史は織物歴史博物館などで調べられる。

#### ◇ローマ時代からルネサンス時代の建物まで

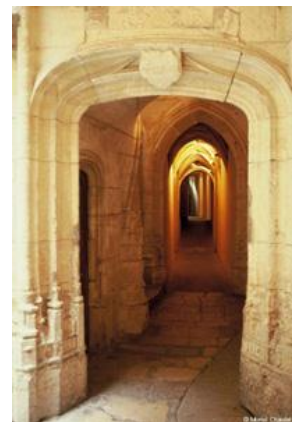
フルヴィエールの丘に登れば、ガリア＝ローマ時代の遺跡が残る。



© Jacques Léone/ Lyon Tourisme et Congrès

#### ◇トラブール(抜け道)を散策

こちらからあちらへ通り抜け。トラブールとはリヨン独特のもので、ラテン語で、建物の内部に作られた通り道を意味する。リヨン旧市街は、ルネサンス様式の建物が二本の平行する道の間に、細長い形状でピアノの鍵盤のようにぎっちりと並んでいる。できるだけ多くのスペースを確保するため、道と道の間を縦につなぐ路地はほとんどなかったが、建物の内部に抜け道(トラブール)をつけたお蔭で、遠回りをせずに建物の向こう側の道へ簡単に移動できるようになった。建物の内部を通る道なので、住民の暮らしを少しだけ垣間見られる。リヨン観光局の「トラブール・ツアー」に参加すれば、普段閉鎖されている通路を見せてもらうこともできる。なお、トラブールは第二次世界大戦下、レジスタンスの逃げ道として使われた。



© Marie Perrin/ Lyon Tourisme et Congrès

## ◇ 絹織物の都

● 織物歴史博物館 MUSEE HISTORIQUE DES TISSUS

15 世紀以降、絹織物で栄えてきたリヨンの織物の歴史を表わした絵画をはじめ、フランスの宮廷衣装やタペストリーなど年代もののコレクションが豊富。マリー・アントワネットがリヨンに発注、宮殿の寝室を飾ったカーテン、ベッドカバーもある。  
[www.musee-des-tissus.com](http://www.musee-des-tissus.com)

## ◇ 食の都

「リヨンの母」と呼ばれる女性たちに育まれたリヨンの食

まず絹織工や絹織業従事者向けの食堂を開いた女性たちは、そこでブラルド・アン・ヴェシー(若鶏の内臓詰め) やカルドン・ア・ラ・モエル (アザミの骨髓添え) のようなシンプル且つ繊細な料理を誰にでもふるまった。とくに有名な「ブラジエ母さん」とユージェニー・ブラジエは、1921 年頃から食通たちをもてなすようになったが、その中にはド・ゴール将軍、リヨン市長エドゥアル・エリオのような著名人の名も。かの有名なポール・ボキューズも、若き日に彼女のもとで料理人としての修行を積んでいたのだった。

「ブション」と呼ばれるリヨンの庶民的なレストランでは、豚肉の加工品類(ハム、パテ、ソーセージ類)、クネル(すり身の団子)、セルヴェル・ド・カニユ(ハーブを加えたフレッシュチーズ)、プラリネのタルト、クッサン(ガナシュをマジパンでくるんだお菓子)などが有名。

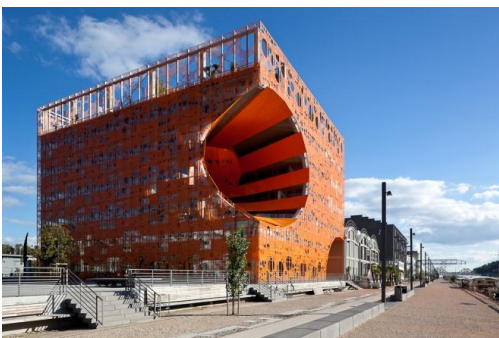
一方、リyonは美食界の巨匠ポール・ボキューズのお膝元。中央市場はボキューズ市場とその名を冠している。リyonは近年ガストロノミクなレストランの層が厚くなっており、2014 年版ミシュランでは、新たに 3 軒の 1 つ星が加わり(うち 1 つは日本人シェフの店 Takao Takano)、星付きレストランの件数は全部で 15 軒となっている。

## ◇ 現代建築、再開発都市進むコンフリュアンス地区

リyonでは 20 年ほど前から、有名建築家による改修作業や新築が続いている。

ローヌ川とソーヌ川の合流点にあるプレスギル地区ではリyon国立オペラ劇場が 1993 年に、ジャン・ヌーヴェルによって改修された。彼はガラス製のドームを付け加えることによって、建物の様相を大きく変化した。テロー広場も 1994 年にダニエル・ビュランがリニューアルを行った。

目下注目を集めているのがコンフリュアンス地区。ここは 150 ヘクタール以上に渡り再開発が行われており、ジャン＝ミッシェル・ヴィルモットやリュディ・リショッティ、ジャン＝ポール・ヴィギエ、ジャック・ヘルツォーク、ピエール・ド・ムロンといった著名建築家が建築の刷新に参加している。コンフリュアンス美術館は今秋にオープン。



©Jakob + MacFarlane architectes - Photo Brice Robert

フランス観光開発機構 プレスコンタクト

佐藤由紀子 - 03-3582-0994 増田真由美 - 03-3582-6968

[presse.jp@atout-france.fr](mailto:presse.jp@atout-france.fr)